

## 第I分散会

座長 吉木祥介

副座長 古河良啓

助言者 田澤元泰 蓑輪顕量

記録 本間文裕

運営 鈴木隆泰 石原顕正 福島正堯 成田東吾

### 一、運営について

第I分散会の参加者には、事前に分散会で使用するアンケート用紙を配布した。アンケート用紙には、基調講演を聴いて、感銘を受けた点とそのように感じた理由を記載してもらった。参加者の意見を事前にまとめてもらった上で、分散会に入った。分散会では、参加者に発言しやすい環境を作るために、三つのグループに分けて進め、分散会座長は一日目と二日目で異なる者が担当した。

### 二、分散会討議

#### 一日目討議

一日目の前半は、参加者全体で討議する形をとった。自己紹介と基調講演の感想を三分程度で述べて頂き、全体での気付きの共有を行った。そこで挙げられた気付きは大きく四つに大別できる。

一つ目は、鈴木師の講演の中にあった「人は死ぬ」、「私は死ぬ」という自分の中の乖離の問題に対して大きな興味

が寄せられていたことである。中でもここ最近で、「病」や「死」を身近に感じる経験のある方にとっては、大きな気付きに繋がったことがわかった。

二つ目は、法師による如来の代行が、久遠釈尊の実現へと繋がることに関する気付きが挙げられた。そこから、改めて自分の役割の重要性に気付くことができ、自分の役割に自信を持てるようになったという意見があった。

三つ目は、御降誕に関することである。講演を聴いて、自分は前世の業により僧侶の縁を得たのか、自分の罪業とは何か、という問いが自分自身の中に生まれたことによって、御降誕の意義を改めて考える機会となったという内容である。

四つ目は、仏教語の理解が深まったという意見である。これは多くの参加者から挙げられた意見であった。（四諦 八正道・諸行無常・願生など）

一日目の後半は、参加者を三つのグループに分けた。「御降誕の意義をどのように受けとめ、実践していくか」というテーマの下でグループごとに討議を進めた。

グループ討議では、御降誕に対する行事として、法要を毎年行っているという意見もあったが、朝勤での回向に留まっているという意見が多かった。御降誕を重要視していなかったが、宗祖が生まれていなかったとしたら、法華経やお題目は弘まっていたのだろうか、念仏がより強く根付いていたのではないか、果たして自分は出家したのだろうか、という意見があった。その他にも、宗祖の御降誕により生まれた国宝や文化が多くあること、宗祖によって救われた人が多くいること、我々の寺院が地域に根差していること、これらは宗祖の御降誕が無ければ存在することはなかったのではないかという意見が出された。

これらのことから、宗祖の御降誕に対する感謝の心を持つことの大切さに気付かされ、改めて御降誕の意義を問い直す必要があることを再確認する分散会一日目となった。

## 二日目討議

二日目の始めには、一日目の討議の内容、二日目の講師であるカール・ベッカー氏の講演内容、三原所長の講演内  
にあった勝五郎生まれ変わり物語の三点における振り返りを全体で行った後に、グループ討議に入った。

グループ討議では、カール・ベッカー氏の講義に対する気付きの共有に重点を置いた。そこで挙げられた意見は、新  
発見と再確認という二点に大別できる。

新発見に関しては、普段飲んでるコーヒーや砂糖の裏側にある貧困の問題、お題目で病気の回復力が上がるとい  
うハーバード大学の研究、医療の自己決定の問題、不幸の死や不平等に対する考え方が挙げられた。

再確認に関しては、輪廻が人から人に限ったものではないこと、臓器提供・人口増加・成仏などと輪廻が関係性を  
持っていること、医療の自己決定権における問題点、グリーフケアにおける供養の意義、地域コミュニティにおけ  
るお寺の役割などが挙げられた。

二日目の終わりに、助言者を務められたお二人のご意見を伺った。

### 田澤師

三世観が、いかに大切であるかということに気付かされた。我々は、輪廻する三世観の中で生きているという大前  
提の基で、物事を考えている。この世の中で、自分が認識できている時間的な三世観という価値観だけではなく、そ  
れを超えた隣り合わせの世界があることを認識することが大事である。

### 蓑輪師

様々な問題を自分自身の問題として捉えるにはどうしたらいいのかということが、テーマになっているように感じ

る。輪廻というものをどのように捉えていくのが重要である。南アジアの輪廻思想が、日本に入ってきて、お寺で輪廻の価値観が説かれるようになった。俱舎論には、七日ごとに人間として再生していくことが説かれている。早い人では七日間、遅い人でも四十九日間で生まれ変わる。しかし日本では、黄泉の国に行くと考えられる。この差異をどのように乗り越えていくのか、という営みが日本の僧侶の中で続けられてきた。現場にいるそれぞれの僧侶が、自分の問題として受け止めて、解決の道を作ってきた。カール・ベッカー氏の、輪廻はあるということを考えながら、向かい合うことが必要である。

### 三、おわりに

第1分散会では、参加者同士の気付きの共有を大切にしたことにより、今までやってきたことが間違っていないか、たことを再確認することに繋がっていった。

輪廻転生という概念を、世間の人に分かりやすく伝えていくことは容易なことではない。学びを深めていく必要性が、分散会の中でも終始問われていた。

助言者の養輪師は、直面する問題を、自分の問題として捉え、向き合っていく姿勢が重要であることを述べられていた。まもなく迎える宗祖御降誕八〇〇年にあたり、自分自身がその意義をどのように捉えるのか、どのように伝えていくのが大切である。二日間の学びは、自らに御降誕の意義を問い直す機会となった。

## 第Ⅱ分散会

座長 柴田章延

副座長 伊藤瑞康

助言者 石川浩徳

記録 水谷進良 坂輪宣政

運営 堀田泰寛 中村龍央

### 一、運営について

第Ⅱ分散会は二十三名が参加した。事前の注意点として、討議が開催趣旨や講演内容から大きくそれないことに留意した。一日目は、講師三名の講演「『法華経』から見る日蓮聖人降誕の現代的意義」「歴史から見た日蓮聖人」「日本人の死生観と生まれ変わりの明と暗」の要旨について確認した。その方法として、参加者にポストイット用紙を配布し、印象に残ったことを書いて頂いて、大まかに分類した上でホワイトボードに貼り、それを参考にしながら討議を行った。

### 二、問題提起

最初に、座長より宗務院発行の冊子「立正安国・お題目結縁運動 布教方針」を掲げて、但行礼拝をなさつていまずかという問いかけを行った。ほとんどの参加者が何らかの形で行っていると挙手した。ただし、宗門運動の但行礼拝を単なる合掌礼と認識している参加者が多かった。但行礼拝の本質は何か、それを踏まえて降誕八〇〇年を迎える

にあたり宗門運動を通じて何ができるのか、と座長より問いかけ、その答えを二日間にわたり一緒に考えていく討議とした。

### 三、分散会討議

一日目は、座長より御誕生を中心に話し合うとの方針が示され、鈴木隆泰師の講演と質疑応答における上行菩薩についての疑問点について討議を行った。聖人の二つの自己認識、つまり過去世において法華経に背くことがあったという自己の罪認識と、上行菩薩の生まれ変わりであるとの認識が、本化の菩薩が法華経に背いていたことになって矛盾してしまうのではないかという点について、次のような意見があげられた。

- ・矛盾とは思えない。聖人はご自身を謙虚に考えられていたから。
- ・前世で謗法を行ったというお言葉から考えれば、逆縁とはいえ前世から法華経にご縁があったともいえる。
- ・前世は複数あるので、ご縁も種々あってよいはず。
- ・檀信徒には、ご縁があったのだからこれから種を育てましょうと説明すればよい。
- ・無明という言葉から解釈すれば矛盾ではないのでは。
- ・謗法も正法に近づく逆縁であり、前世というものも前々世などあるので一つではない。その中で上行菩薩とのご縁もできてくるのではないか。

ここで、座長より生誕の前提としての性行為についてどう考えるか、それを僧侶が行うことはどう考えるかという点について、次のような意見があげられた。

- ・僧でも社会的に認知されているので問題ない。

- ・現代の時代背景では弟子をとるのは困難なので、子供を育てるために性行為をするのだから仏法のためでもある。
- ・はたして仏教は禁欲なのだろうか。性欲はコントロールできるのが大事でそれが可能なら問題ない。
- ・僧侶の本質を忘れずに。心の中のブレーキが大事。
- ・それを考えていたら生活できない。程度が重要であり檀信徒も子供がいたほうが喜ぶ。
- ・弟子はかつてのような徒弟制度ではむつかしく実子でもっている面もある。
- ・明治以降、女犯の定義も変わり檀信徒の受け取り方も変化している。
- ・執着や煩惱を知ること重要。
- ・夫婦間ではよい。
- ・企業研修をしているが、様々な問題で本音と建前があると思う。
- ・体外受精で子供をつくれれば女犯に該当しないのではないか。
- ・それでは味気ない。人間の性行為は昆虫の交尾とは違う。苦を救うのが仏教、欲があるから発展する。
- ・出家するとかっかりするよというお話を何度も聞いたが実際そうだったと実感した。ただ遺文を吟味して妙法五字を世に弘めてゆくという使命を与えられている存在と気づき充足して布教している。
- ・人間は動物と異なり快楽を必要とする進化を遂げた。
- ・人間も動物であることを再認識すべき。

一日目後半は、座長から現在自坊では降誕会を行っているか、また今後も持続可能な宗門運動を想定しているか、さらに降誕八〇〇年の後にもどのように継続していくかという点、さらに持続可能な降誕会を立ち上げることは、誕生会という明るいイメージがあるので企画しやすく、また参加もしやすいのではないかという質問があげられ、参加

者から降誕会についてのそれぞれの地域や寺院での事例が紹介され、宗門運動とのつながりについて次のような意見があげられた。

- ・ 降誕については、以前から新入学年度の児童を主な対象として、聖人降誕に併せて会を開き、ご祈祷やビデオなどを配布している（この報告は会の中で注目され、自坊でも検討したいなどの意見があった）。
- ・ 檀信徒の子供たちのお誕生日を祝う会を年一度行っている。
- ・ 毎年子供道場をして八十名ほどの参加者がある。子供に参加してもらえようにするのが良い。
- ・ 釈尊降誕会を花祭りとして年中行事として行っている。
- ・ 涅槃会は行っている。
- ・ 涅槃会と併せて行っている。
- ・ 奈良県では以前から国禱会とあわせる形で降誕会を行っている。
- ・ 山口県ではこれから万灯講をつくるので、それを機に降誕会もはじめたい。
- ・ 統一信行、研修道場など機会はいろいろある。僧俗ともに新しい刺激をうけることは良い。
- ・ 聖人降誕会の意味付けについて、鯛ノ浦での奇瑞の説明はしれないが旃陀羅の子という聖人のお生まれや上行菩薩再誕の説明はしている。
- ・ 山門にのぼりや旗を掲揚するなど周知の方法を考えたい。各人の誕生日とリンクさせるのもよい。
- ・ そもそも、降誕会は昔から広く行われていたのか、という疑問がある。
- ・ 物理的な生誕にはあまり意味はない。日付は重要なのだろうか。
- ・ 節分にあわせて御祈祷会をしているので、降誕会も一緒にできれば。
- ・ 節分とは趣旨が異なるので抵抗がある。



・仏教はそもそも生まれること死ぬことをあまり重視していないのではないか。それよりも日々どう生きるかが重要ではないか。

・意義付けとしては、行事化すると自覚を持つことにつながるからよい。週刊誌の広告枠を買って日蓮宗という名前を弘めるだけではなく理念などを詳しく示すほうがよいのではないか。

ここで日蓮宗が週刊誌に掲載した広告の話題が上がり、高佐宣長元現宗研主任から当該広告と読売新聞東京都内版の千鳥ヶ淵戦没者墓苑広告について説明された。さらにユーチューブの知名度ランキングで日蓮聖人の順位が思いのほか低いことや未信徒へのアプローチとしてバースデー行事は有効かもしれないという意見があった。これらの意見をうけ未信徒へのアプローチを意識した降誕会を令和三年度からはじめてはどうかという提案が出され、一日目が終了した。

二日目は、カール・ベッカー氏の講演をうけて、参加者にその感想を求めかたちで進行された。

最初に、副座長から輪廻というのはそこから解脱するべきものであるという仏教の基本的立場が語られ、ベッカー氏が輪廻を肯定的にとらえているのにもむしろ驚くという見解が出された。さらに輪廻という仕組みが苦であり、その仕組みから逃れるのが理想であり霊山往詣できれば良いとの解説がなされた。赤堀正明元現宗研主任からは仏教の教義的観点から、輪廻は願生と心生がある。五種の願生、無明を明知に変えるなど、輪廻六道の説明があった。その後、参加者から次のような意見があげられた。

・輪廻をもっと利用できればよい。退行催眠などの前世療法もある。ただ、苦しんでいる人たちに前世といったら更に苦しめてしまう可能性もある。

・講演は否定的に聴いた。退行療法は特に怪しい。疑似科学の話が多かった。

- ・輪廻と十界は我々の帰依しながら向かうべき場所である。
- ・輪廻は前世の業として理解できる。
- ・ベッカー氏は人から人への転生しか示さなかったが、本来は十界全体ではないか。
- ・輪廻への理解が深まった。前世の業と考えればわかりやすく説明できる。
- ・供養には生きている人たちのためという面もある。「信じている」と「利用する」の差は大きい。信じるには体験が必要だ。
- ・グリーフケアは真似のように感じる。如何に生きるか、如何に死ぬのか。その手伝いの場所がお寺。
- ・先祖供養は日本仏教の特徴の一つである。
- ・霊山往詣とグリーフケアの話が印象に残った。
- ・前世の記憶の話をもっと聞きたかった。これが説明できれば人々の悩みの解消につながるのではないか。一方で自己の不幸が前世の過ちによるとなるとかえって傷つけてしまう心配もある。
- ・ヨリダイなどの口寄せの伝統も宗門にはある。
- ・我々は十界を知っているのがメリットである。
- ・ハンセン氏病の問題などもあるので教師は経典と照らし合わせる必要がある。
- ・ベッカー氏は輪廻再生を信じている。霊魂には供養が必要。教学や理屈ではない宗教的体験によって得られることも多いのではないか。
- ・輪廻再生を信じようとしないう教師が多い。輪廻転生が前提だと葬儀等の意味がないので遺族には伝えづらく普段の教化では話しにくい。
- ・管内ではエンディングノートを作成している。

・ベッカー氏の話が一番印象深かった。因果応報も輪廻転生の延長線上で可能。積尊の御子という自覚が十分でない。末法はお題目によるべき。

・自分と同世代の人々には死んだらそれまでという感覚がある。災害などの社会的因縁は個人的因縁と違って不合理な面がある。

・マインドフルネスを取り入れているが、信仰と健康法は違うというのを実感している。問口を広めるのはいいがお寺でする意味を吟味しなければいけない。

・輪廻転生の考えを利用しての自殺予防は良い。京都アニメーションの事件などあるので、因果応報や輪廻転生があるから安心してとは安易にはいえない。

・こちらの地方では仕事を求めて若い人が流出するため、看取りを自宅するのはむずかしい。

このような意見が出た後、座長から死後の世界の伝え方について質問され、次のような意見があげられた。

・『十王讚歎抄』で説明している。故人は生まれ変わっても我々を応援してくれると説明している。

座長から納骨の時期について、特に四十九日に納骨する根拠について質問され、次のような意見があげられた。

・お骨に魂があるのできちんと弔うのが重要と説明している。中有だから四十九日と説明。

・二重の不幸を避けるためにも柔軟に対応する必要がある。

座長からもう一度但行礼拝について、特にこれからの抱負について質問され、次のような意見があげられた。

・相手を認めるという意味でしている。ただまだ途上と思う。

- ・形を整えるのは大事。宗務所では教師同士で合掌礼拝している。檀信徒には形が整ってから説明をしてゆきたい。
- ・精神を形として顕して見せることが大事。最近は衣姿でラーメンを食べに行くなどしている。きちんとありがとう、ごちそうさまを言うようにしている。

- ・布教方針を踏まえて行うのが大事。まだできていないが、これからは但行礼拝等の菩薩行をしたい。

- ・他者に対して仏さまの心をもって接していくように心がけている。

以上の意見から、私たちの意識が変わることが生まれ変わりとイえるのではないかという言葉があり閉会した。

#### 四、まとめ

第Ⅱ分散会の討議を振り返ると、全体を通して熱心で充実した討議であったといえよう。運営する上で、今年度は講演者が多く内容が広汎なため討議の焦点がどのようになるか事前に判断しにくいこともあったが、開催趣旨から外れず、しかも参加者の問題意識や討議意欲を喚起すると思われる小テーマをいくつか提示して、それを呼び水として活発な討議が進められた。小テーマとしては「僧と性」「降誕八〇〇年の行事」などである。これに対する参加者の反応は、積極的な発言も多くある一方で、講演のテーマが日頃から慣れている事柄でなかったためか受け身の対応となる場面もあった。しかし全体的には、講演に触発されて多数の意見が出され、各地の事例が多く紹介されたことなど、参加者が様々な視点からの意見交換を行い、理解を深めることができた。また二日間の討議によって、降誕の意義や死生観について改めて熟考する機会となったことは、展開されている宗門運動をふりかえる中で、今後の運動を考える良い機会となったのではなからうか。

降誕八〇〇年を迎える直前に、このような討議ができたことは極めて有益であり、これからの宗門運動にも資するものである。

## 第Ⅲ分散会

座長 齋藤宣裕

副座長 渡邊英晃

助言者 星 光諭

記録 鈴木宏彰 松井大宗 原 一彰

運営 灘上智生 都 泰雄

### 一、運営について

本分散会では初日に計二十名程の参加者を四つのグループに分け、運営側から議題を三つ提示し、各グループ内で議論した内容を代表者に発表していただき、その後まとめとして全体での議論を行った。提示した議題はこれまで教師として培ってきた仏教の基礎知識を見直すことを念頭に置いたものである。一見すると教学上基礎的な議題の為、議論すること自体に意味を感じないかもしれないが、今回は基本的な教学の内容について掘り下げていき、参加者の仏教学、また日蓮教学に対する理解に厚みを持たせることが運営側としての意図である。また、全体での議論だけでは参加者全員の意見を上手く汲み取る事が困難である、と以前の中央教化研究会議でも危惧されていたので、参加者全員が各々の意見を主張出来る様にグループでの議論を採用した。その導入としてアイズブレイクを目的とした他己紹介をまず隣同士で行い、参加者全体が打ち解けた上でグループを形成して、各々の意見を述べて頂いた。

二日間を通して、やはり議論が行き詰まる場面が多々あった。運営側から提示した議題が些か難解であったため、運営側が議論の誘導をする必要があると感じた。昨年と同じく時間の関係でグループ内での議論では一つの議題に対

して十五分の時間を設けたが、今回は時間が余ってしまい、また上がった意見が他の議題の意見と類似することも少なくなかった。結果として、参加者各々に仏教に対する理解不足の危機感を持つていただくという運営側の目的は達成されたが、参加者間の議論が滞ってしまったことについて検討の余地を感じた。

## 二、問題提起

令和三年に宗祖降誕八〇〇年を迎えるにあたり、宗門および各管区でも様々な事業が予定されているが、我々教師は日蓮聖人の御降誕の意味について熟知しているのだろうか。御承知の通り、日蓮聖人は『開目抄』において法華経の行者であることを自覚され、これは後に形成される日蓮聖人の上行自覚に繋がるものであり、日蓮教学において非常に重要視されている。我々教師はそれを何の疑いもなく聞き入れ、それを自分の言葉で檀信徒に伝えているが、本当に我々が伝えていることは正しいのだろうか。事実、この上行自覚の法門を疑問視する声もある。日蓮聖人は確かに御自身を法華経の行者であると明言されているが、自らを上行菩薩として表明されているのか。その証拠はあるのか。御遺文で表明されているのか。では実際に日蓮聖人が上行菩薩の自覚をされていなかった場合、日蓮聖人が降誕された意味は既存のものからどう変わるのか。殆どの人間は学ぶ際に教わった内容を事実として聞き入れるだけで、自らその正否を探求するまでに至らない。しかし来年、宗祖降誕八〇〇年を迎える日蓮宗が、そして我々が、教わってきた当たり前の事実を今一度確認すべき時であると考ええる。無論検証の結果、日蓮聖人が確かに上行菩薩としての自覚を持たれたという結論が変わらないことも十分に考えられる。そうであれば、まず日蓮宗教師が宗祖の降誕の意義について十分に議論し、熟知することが、来年以降の布教において最も基礎的で重要な意味を持つてくるのである。

## 三、分散会討議

本分散会では初日はまず参加者同士の他己紹介を行った。その際に鈴木隆泰師、中尾堯文師の講演を聴講した感想も述べていただいた。前述したが、運営側としては今回の中央教化研究会議では参加者に自分達が知っているようでは目を背けていたという事実を確認していただくことが何より重要であり、参加者の感想からはその旨趣を垣間見ることが出来た。また「降誕や生死という、一般生活者に大変需要のあるテーマについての勉強不足を感じた」という意見が出たことは非常に意義のあるものであった。参加者の感想は以下の通り。

- ・全体的に自分の勉強不足を感じた。
- ・普段檀信徒から相談される事を講演で説明していただいたので、布教現場で活かせる知識を持ち帰ることが出来た。

・今日の講演をいかに檀信徒に伝えていくかが、現場で今求められていることであると感じた。

・「降誕」という言葉を檀信徒及び未信徒にどのように答えていくべきか、布教現場での活かし方がわからない。

その後運営側から議題を二つ提示し、各グループで討議していただいた。運営から提示した議題は以下の通り。

### ① 日蓮聖人御降誕と我々の誕生の意味とは。

日蓮聖人が生まれた意味について問われた時、殆どの教師が末法の衆生を救うためという救世主論を唱える。また教師自身の出生の本懐についても、皆口を揃えて如来が遣わした使者であると口にする。日蓮宗内においてはもはや通例ともいえる謳い文句であるが、聖人は自身の生まれた理由について願兼於業、謗法の業によるものであるとマイナスな面も語っている。聖人は自らの生まれ変わりにおいて、正と負の両面から考察されているのだから、我々もまた自身の生まれた理由を考える時は負の面にも目を向けるべきであり、その過程が最終的に「生まれる」ことの意義

を深めていくことになる。日蓮聖人は何故あの時代、清澄という地で生まれたのか。また何故我々は「生誕」ではなく「降誕」という言葉を使うのか。今まで確認してこなかった意味を一つずつ確認していく。

② 上行自覚の正否について。

日蓮聖人が上行菩薩としての自覚を持たれたと解釈されるようになったのは実は近代になってからであるが、殆どの教師がこの事実を認識していない。さらにその根拠となる御遺文の表現も曖昧なものであり、聖人がはっきりと上行自覚を明言したとは言い難いのである。果たして本当に日蓮聖人は上行菩薩としての自覚を表明されたのか。またそうであれば何故そのような理解が広がってしまったのか。上行自覚そのものと、教師全体の学ぶ姿勢について考えていきたい。

以上の議題は今まで日蓮宗内で常識として扱われてきたことを今一度問う内容である。これを議論すること自体に否定的な意見もあるだろうが、降誕や生まれることの意義が理解出来なければ、そこから派生した様々な事業も意味を持たないことを理解した上で討議して頂いた。以降各グループ及び全体会議で出た意見を列挙する。

① ・日蓮聖人の降誕があつてこそ、今日の自分達の布教がある。日蓮宗の僧侶として生を受けたからには、布教しなければならぬ。

・自分が願って生まれたという事実が（経文に）あるのだから、それに喜びを感じなければならない。布教に喜びを感じなければならない。

・日蓮聖人が裕福とは言えない環境の中に生まれたという事を尊重することが布教現場では生きていく。御一代記を日蓮宗のイメージ戦略として活用していくべきである。

② ・色読Ⅱ上行自覚であり、聖人の生き方そのものが上行菩薩ではないか。



- ・教わってきたことに疑問を持たなかった自身の無知を感じた。
- ・日蓮聖人の生き方を上行自覚としてきたが、今後は八〇〇年に向けて上行自覚について基本から学んでいくべきである。
- ・上行自覚以前に、それぞれの菩薩の違いについて理解できなければ、聖人の生き方も理解できないだろう。しかし理解できればそれを布教のツールとして生かすことが出来る。

これらの意見から、やはり参加者からは自身の生まれた理由について従来の使命感の域を出なかったことが伺えた。その一方で「降誕」や「生死」というワードを布教の材料として使おうとする意見が出てきたことは大変喜ばしいものであった。我々研究所側もまだまだ研究不足だが、一般生活者から最も高い需要を誇る「人間の生死」について研究していくべきであると感じた。

二日目はカール・ベッカー氏の講演を終えて、参加者にその感想を自由に述べていただいた。参加者からの感想は以下の通りである。

- ・死自体が恐怖であるというイメージを払拭することがこれからの多死社会では求められてくる。
- ・生まれ変わりの概念を教化の場で用いて「死後の世界」を明確にすることで、後生の不安を解消することだけでなく、現世での臓器移植や助け合いなどの慈悲に繋がる。
- ・教化の場では経文に関する科学的論証をいかに活用するかが肝であり、病院と僧侶、宗教に対する恐怖心に科学の面からアプローチしていく必要がある。

#### 四、まとめ

この二日間で学んだことは、現在の宗門の教育機関では学べなかったことである。いや正しくは死後の世界、霊魂という言葉は仏教における基礎であるが、あまり深く掘り下げて来なかったというべきだろう。「死後の世界」霊山浄土」であり、そこに至る術が御題目である。教師の誰もがこう答えるだろうが、それだけでは一般生活者を満足させるには至らないのが現実である。法話とは今まで教師が自分の話したいことを自身の知り得る範囲で話してきたが、科学が発展し、宗教における不思議の世界が徐々に可視化されてきたこれからの社会においては、一般生活者の疑問に答えることが出来る、最も基本的で、最も難解な部分が必要とされるだろう。

## 第Ⅳ分散会

座長 岩田親静

副座長 中井本蓉

助言者 中村潤一

記録 池浦英晃 河崎俊宏

運営 藤崎善隆 菊岡妙光 及川一晋

### 一、運営について

第Ⅳ分散会では、参加者、運営者、助言者合わせて計二十名による討議が行われた。今回の中央教研は分散会形式をとり問題提起はなかったため、「宗祖降誕八〇〇年―日蓮聖人の宗教を考える―」のテーマのもとに行われた基調報告・講演自体が問題提起であると受け止めるのが適切であろう。

一日目は、参加者に三つの講演を受けた率直な感想・意見を、討議に先立ってポストイットに記入し、自分の考えをまとめてもらった。それに基づいてそれぞれ意見を出し合った。一日目討議終了後、再びポストイットへの感想記入を求め、参加者からこの日出たお互いの意見を踏まえた上で、どのように認識が深まったのかを確認してもらった。二日目は、カール・ベッカー氏の講演を聴き、そこから学んだことなどについて述べ合った。ベッカー氏の講演内容は「死生観」であったことから、前日までとは異なる視点の導入があり、日常の具体的な法務などに関わっての発言があった。なお、「生まれ変わり」についてのひとつの例として基調報告で言及された東京都・日野市に伝わる

「勝五郎生まれ変わり物語」の概要を運営側から紹介もした。

最後に、二日間にわたる討議内容から、自身の気付き、学びなどについてポストイットに自由に記入してもらい、分散会を締めくくった。そして最後のポストイット記入では、とくに降誕八〇〇年を迎えるにあたり、自分の今後の課題についても触れてもらうようお願いした。

## 二、分散会討議

前述の通り、ポストイットに記入してもらったものに基づき、基調報告・講演を受けた率直な感想、とくに日蓮聖人の「上行自覚」「誕生」について思うところを参加者に発言を求めた。参加者にとっては、三つの講演の多岐にわたる内容のなかで強く印象に残ったものについて触れるものが多かった。主だった意見を次に列挙しておこう。

- ・日蓮聖人の色説の問題。理想と現実のあいだの苦。
- ・日蓮聖人ご自身の罪業意識が、上行自覚を持たれることへの導きとなったことがわかった。
- ・近年のインド仏教学をはじめとする学術の成果にふれることができた。
- ・「苦諦」概念の咀嚼がまだできていない。
- ・「願生」に関心を深くしたが、まだ講演のなかで引用された御遺文の記述と結びつかない。
- ・日蓮聖人の苦しみを再確認する機会となった。
- ・過去世からの罪業、一生涯の使命感といったテーマが自分のなかで深まった。
- ・佐前、佐後の問題を考えた。いつごろから聖人は罪業を抱いていたのか。
- ・末法万年のなかで、今こそ法華経の精神を生かす時。
- ・僧侶の歴史ではなく、「民衆も含めた教団史に」というメッセージが印象に残った。

- ・日蓮聖人の歴史を客観的に体系化することの必要性を感じた。檀信徒にどう説いていくかが大切。
- ・歴史学と宗教学という視点から、宗祖を客観的に見る必要がある。
- ・現代社会のなかで、「色説」は本当に可能なのかという疑問。自分にできないことを自覚しながら僧侶をやり続けることに自問自答する。

・信仰の悦び、法悦をつねに持ち続けること。

・「日蓮聖人と共に歩む」という感覚が大切。

・私たちの儀式の中にあるものに宗教的な意味づけをする作業のくり返しが重要ではないか。

以上のような、意見や考えが参加者からあった。

一日目の討議の終わりに、分散会に臨席頂いた顧問、オブザーバーのお二人より意見を頂き、「『上行自覚』という言葉にあまり引っ張られすぎではないか」との議論全体の偏りへの指摘や「宗祖を原点として宗門は、そして私たちはどう生きるかという問いかけによって降誕八〇〇年の意義が見えてくる」、「在家の人々の視点をよく考えてみるべき。いま、社会は濃い宗教性を求めてはならず、『抜苦与楽』を求める傾向にある。私たちはこうした問題設定のレベルのズレを認識しつつ、何を伝えてゆくのかを議論するべきではないのか」といった指摘とコメントがあった。

参加者はポストイットに一日目の議論を聴き、考えたことを書いて退室となった。

二日目の討議の前に、座長より参加者に書いてもらった一日目の感想をまとめたものが運営側より披露された。その後、カール・ベッカー氏の「死生観」をテーマとする講演を受け、限られた時間ではあったものの、参加者自身の布教の場に即した話が語られた。臨床宗教師研修を受けて病人の家族と向き合い、医療の現場にも足を運んでいる経

験の報告や、「輪廻転生を檀信徒にどう説くか」「靈山往詣のわかりやすい伝え方」という教化上の問題、通夜葬儀・中有供養などを通して「日蓮宗の死生観をいかに説くか」といった内容が参加者から出された。また、その他、参加者より言及があつたものを以下、箇条書きにまとめておく。

- ・生まれ変わりの問題にもっと理解を深めたい。
- ・四十九日忌は「安心」を得てゆく大切なプロセス。
- ・通夜葬儀も大切であるが、七日勤めを通して、遺族に「死」を受け容れてもらうこと、実感してもらうことが重要である。
- ・願生としてまたこの世に生を受ける。
- ・僧侶ばかりが一方的な話をしない。
- ・七日の勤めは、故人の振り返り、故人とのつながり、生前の生き方を問う機会である。

## 二、まとめ

今回の中央教研は「日蓮聖人の宗教を考える」という広いテーマであつたが、三つの講演を十分に咀嚼しきれないまま、「降誕」、「上行自覚」、「再誕」、「願生」といった中心課題やキーワードについて考えなければならなかつた。そして、二日目には自身の日々の教化活動とも照らし合わせながら、参加者それぞれが、この宗祖降誕八〇〇年という節目に何をこれからの課題としてゆくのかを模索する機会となつた。第IV分散会に出たさまざまな意見では、問題の大きさへの戸惑いも見られたが、それはかえって私たちのなかにまだまだ宗祖の教えに対しての新しい問いが生み出されるということでもある。分散会討議がそのきっかけとなる機会であつたと願いたい。